花祭り（灌仏会・降誕会・仏生会）のお話

お釈迦様誕生のお話

① 白い象の夢と右脇からの誕生

お釈迦様のお母さん（摩耶夫人マヤブニン）は、「6 本の牙を持つ白い象」が体に入ってくる夢を見てお釈迦様を身ごもりました。そして、ネパールのルンビニーという美しい花園でお産をされたのですが、「右の脇の下」からお生まれになったと伝えられています。

※インドで最も強く神聖な動物とされ、聖人の到来を告げる存在。特に「六牙の白象」は六根清浄を意味するといわれています。

※古代インドでは、王族や武士は腕から生まれるという考え方がありました。

② 7 歩歩いて「天上天下唯我独尊」

生まれてすぐ、東西南北に 7 歩ずつ歩き、右手で天を、左手で地を指して「天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）」と言われました。これは「俺が一番偉い！」という意味ではなく、「この広い世界の中で、私たちの一つの命は誰とも代わることができない、尊いものだ」という、命の尊さを教える言葉です。

③ 9 匹の龍と甘露の雨

その時、空から 9 匹の龍が現れて「甘露の雨」という甘い香りのするきれいな雨を降らせ、お釈迦様の産湯にしたと言われています。花祭りで甘茶をかけるのは、この龍が降らせた雨の代わりです。

花祭りと甘茶の史実

● 日本で初めての花祭りは飛鳥時代（推古天皇の時代）

日本で最初にこの行事が行われたのは西暦 606 年、奈良の法隆寺又は元興寺（がんごうじ）だと言われています。1400 年以上も続く、ものすごく歴史のある行事です。

● 昔は「甘茶」じゃなかった！？

実は、最初から甘茶をかけていたわけではありません。昔の貴族たちは、5 つの香料を混ぜた「五香水（ごこうずい）」又は五色水（青・赤・黄・白・黒）と呼ばれる香水のようなものをお湯に混ぜてかけていました。それが江戸時代になって、庶民の間でも手に入りやすく、縁起が良いとされる「甘茶」を使うようになったと言われています。

※アマチャ（ユキノシタ科の落葉灌木）又は、アマチャヅル（ウリ科の多年草）の葉を乾燥させて煎じたもの。花言葉は「祝杯」

● 甘茶の使い道

甘茶を三回掛けて飲んだ後は、持ち帰って家族で飲み、残りは甘茶で墨をすり、虫除けのおまじない**「千早振る卯月八日は吉日よ、かみさげ虫を成敗ぞ」**を書いて扉や柱などに貼るという風習もあったようです。そのことから、現在もムカデ避けに庭に撒くために持ち帰る方も多いようです。

その他には**「八大竜王茶」**と書いて天井に貼れば、雷の災いを免れるともいわれているようです。

● 「花祭り」という名前は意外と新しい

お寺では正式には「灌仏会（かんぶつえ）」や「仏生会（ぶっしょうえ）」と呼びます。「花祭り」という親しみやすい名前になったのは、実は明治時代（または大正時代）になってから。ドイツの『日本誌』という書籍の中で灌仏会を「Blumen fest（花祭）」訳した事が始まりとも言われています。